

《2012 年度華僑華人学会第 1 回研究会報告》

日時：2102 年 12 月 8 日（土）13 時～18 時

会場：東北大学文学部文学部棟 2F 大会議室

テーマ：「僑郷華南の現在」

主旨説明

川口幸大（東北大学）「僑郷華南の現在」

市川哲（立教大学）「海外華人研究と僑郷研究の連動の可能性」

報告

川口幸大（東北大学）「豊かな僑郷—移住地と故郷の関係を再考する」

稲澤努（東北大学）「現代の僑郷における人の移動—広東沿海の一地方都市を事例として」

兼城糸絵（東北大学）（仮）「人の移動と僑郷社会—福建省福州市の事例から」

長沼さやか（日本学術振興会・東京外国語大学）「華僑のいる村、いない村—広東珠江デルタにおける村落の歴史と構造」

コメンテーター

瀬川昌久（東北大学）

本研究会は「僑郷華南の現在」をテーマとし、華南地域における具体的なフィールドワークの事例から今日的な華僑華人研究の展望を開こうとすることを目的とした。僑郷研究は 1996 年に出版された論集『僑郷華南』を代表とし、研究蓄積を重ねてきた。だが今日の中国本土の劇的な変化やそれに対する海外華人からの対応を鑑みれば、いくつかの問題系を考察すべき時期に来ている。そのためこの研究会ではいずれも華南地域をフィールドとする 4 人のスピーカーの報告から、特に①移動ベクトルの現状、②「伝統復興」（あるいは「故郷の建設」）の担い手の変遷、③華僑／僑郷のイメージと実体の再考、という三つの問題系を検討することを企画した。

当日の研究会では主催者の一人である市川が「海外華人研究と僑郷研究との連動の可能性」というテーマで華人研究と僑郷研究の双方の先行研究をレビューし、90 年代以降、海外華人研究が脱中国中心主義やトランスナショナリズム研究の傾向を強める一方で、僑郷研究は海外の華僑華人を視野に入れながらも中国地域研究の一分野としての性格を強めるという一種の学問的な棲み分けが進んだこと、その結果、海外華人研究は僑郷の現状を、僑郷研究は海外華人社会の現状を、お互いにかなり単純化して理解してきたことを指摘し、この限界を乗り越えるためには以前の中国中心主義とは異なる海外華人研究と僑郷研究との連動が必要であると述べることにより今回の研究会の趣旨説明を行った。次にもう一人の研究会主催者である川口が二つ目の趣旨説明として「僑郷華南の現在」というテーマで、『僑郷華南』で取り上げられた「海外移住と国内移住の連動性」「『伝統』に海外移住が果たす役割」「『華僑華人』という対象指定の予定調和性への批判」といった諸問題の意義を再確認し、今日的な状況のキャッチアップの必要性と、ステレ

オタイプ化した「中国社会—華僑華人—僑郷」という関係性の図式の再考について指摘した。続いて川口、稲澤、兼城、長沼の四名が研究発表を行った。

川口は「僑郷と海外の関係の変化—“豊かな海外”／“貧しい僑郷”パラダイムの転換—」というテーマで発表した。川口はこれまでの僑郷を対象とした先行研究は華僑華人たちによる出身地コミュニティや親族組織への関わりが重視され、そこには「豊かな華僑華人」／「貧しい僑郷」というパラダイムがあったと指摘する。だが広東省広州市番禺区 S 鎮の事例では、現代では香港や海外への移住はかつてのようには希求されず、かつては海外在住者が貢献してきた祠堂の建設等の伝統復興も、現在では調査地の住民が行っており、調査地における海外在住者のプレゼンスも希薄になっている。川口はこの現象を理解するためには、これまでの「豊かな海外」／「貧しい僑郷」パラダイムは通用しない、新たな段階に入っていることを指摘した。

稲澤は「現代僑郷における人の移動—珠江デルタ外縁の一地方都市を事例として—」というテーマで発表した。彼は広東省汕尾市における自身のフィールドワークに基づき、珠江デルタのように目覚ましい発展を遂げた地域とは異なる地方都市における人の移動の特徴を、今日的な移動のベクトルとそれに果たす華僑の役割に注目することにより分析した。稲澤は汕尾と香港との歴史的な関係の深さや、特に密貿易について報告した。さらに汕尾における人の移動の変遷における各時代の特徴を理解する手法として、現地で出版された文学作品の分析を行った。そして稲澤は汕尾はその成立の過程から香港と密接な関係を持ち 90 年代に至るまでその関係は形を変えながら存続してきたこと、その一方で周辺農村から汕尾への流入があること、いまだに汕尾では海外への憧れが強く存在するが現実には深圳や香港に行く者が大多数であることを指摘した。

兼城は「廟の活動にみる人の移動と僑郷社会—福建省福州市の事例から—」というテーマで発表した。兼城は福州市の調査地では 1980 年代頃からアメリカや日本等、いわゆる先進国にむけての大規模な移動が生じ現在もその動きが続いていること、そして海外華僑のプレゼンスも高く、現地の人々の意識にはいまだ「貧しい僑郷」／「豊かな海外」という図式が維持されていると述べる。そして兼城は現在も続く僑郷からの海外渡航により、それまで調査地で行われていた廟の祭礼（遊神）がもはや住民のみによっては開催が不可能になったことを報告する。この祭礼における人手不足という問題に対し、福州市の調査地の住民は、四川や湖南から福州に来る出稼ぎ者（外地人）を雇用することで対処している。結論として兼城は、現在の僑郷は移民を送り出す地でもありながら、同時に受け入れる地でもあること、海外移民により僑郷の村落人口が減少する状況の中、外地人は他者として存在する一方で村落における儀礼を支える存在になっているということを述べた。

長沼は「華僑のいる村、いない村—広東珠江デルタにおける村落の歴史から—」というテーマで発表した。長沼は僑郷として知られる広東省珠江デルタの中でも沿海地域に属する中山市周辺では、多くの華僑を送り出している村落と、そうではない村落があることに注目し、その違いが生じてきた歴史的な背景について考察した。長沼は珠江デルタ地帯における村落史や華僑雑誌を分析し、さらに明代から開発が進み比較的古くから人が住んできた「民田」と呼ばれる地域と、清代や民国期になって開発が進み比較的新しく人が住むようになった「沙田」という地域区分に注

目した。そして長沼は珠江デルタにおける開発のフロンティアである「沙田」では大規模な宗族が発達せず、人々は海外にフロンティアを求めるよりも沙田というフロンティアの開拓に向かったこと、その結果、これらの地域では華僑の送進が進まなかったという可能性について考察した。

以上の趣旨説明および四名の発表に対し、コメンテーターである瀬川からは、『僑郷華南』で行った国内移動と国際移動の連続性に関する議論は、国際移動を伝統的な村落社会の秩序と反する現象であると捉えたJ.ワトソンの研究に対する批判の意味があり、例えば国内で移動した人々は、はじめから大規模な宗族や分派を形成しようとして移住したのではなく、出身地と移住先との関係が一時的に切れたり再構築されたりする過程で、結果的に大規模な宗族の形成につながったのであり、それは海外移民にも共通して見られる現象であったという指摘がなされた。そして今日的な僑郷研究を行う意義とは、単なる最新の時事的な報告に留まるのではなく、僑郷における富や威信、成功者のロール・モデル等を地域社会のコンテクストに即して理解する必要があるというコメントがなされた。

続く質疑応答では、禁止されている移住先ほど憧れや祝祭性が高まるのではないかと、今回の議論は広東の事例が中心であり、閩南の事例とはかなり異なること、僑郷に関する言説の作り方に注目すべきではないかということ、僑郷とは移民の送進が血縁的なイディオムから地縁的なイディオムに変換したのではないかと、といった議論がなされた。